

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520404

研究課題名（和文）山口方言の特殊拍におけるアクセント核の維持に関する知覚と産出についての世代間比較

研究課題名（英文）Generational comparisons of the accent nucleus positions in perception and production of words including special morae in the Yamaguchi dialect

研究代表者

池田 史子（IKEDA FUMIKO）

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10275430

研究成果の概要（和文）：山口県内にのみ居住歴を持つ、若年層 16 名と老年層 16 名の、撥音 /N/、長音 /H/、促音 /Q/、二重母音 /ai/ の副母音の 4 種類の特殊モーラを含む 60 語（各 15 語）の産出において、特殊モーラにアクセント核を置く頻度を世代間で比較した。

その結果、若年層ではアクセント核を同一シラブル内の 1 つ前のモーラへ移動させて発音する傾向が強く、老年層に比べて特殊モーラにアクセントを置く発音が大幅に減少していた。特殊モーラにアクセント核を置いた頻度は、/N/ では老年層 39.58% に対して若年層 5.42%、/H/ では老年層 44.58% に対して若年層 1.67%、/Q/ では老年層 13.33% に対して若年層 0.83%、/J/ では老年層 58.75% に対して若年層 10.83% であった。

老年層の間で、アクセント核が置かれる頻度は特殊モーラによって大きく異なり、3 つに分かれ、多い順に /J/ > /H/ = /N/ > /Q/ となった。若年層の間では特殊モーラにアクセント核が置かれる頻度はかなり少なくなっていた。少ないなかでも 3 つに分かれ、多い順に /J/ > /N/ > /H/ = /Q/ となった。

研究成果の概要（英文）： The conventional Yamaguchi dialect has an accent nucleus on special morae. This phonological feature, however, has been decreasing in frequency of occurrences among people in the younger generation. Thus, the present study investigated generational differences in the accent nucleus position of words including special morae in the Yamaguchi dialect. To confirm this recent change, 16 people in the younger generation (born from 1984 to 1999) and 16 in the older generation (born from 1931 to 1946), who have never lived outside of Yamaguchi Prefecture, were selected to produce 60 words including four kinds of special morae. The results showed that people in the younger generation are likely to put the accent nucleus not on the special mora, but one mora before it, far more frequently than those in the older generation; more precisely younger versus older, 5.42% vs. 39.58% for /N/, 1.67% vs. 44.58% for /H/, 0.83% vs. 13.33% for /Q/, and 10.83% vs. 58.75% for /J/. The study confirmed that people in the older generation displayed the frequency order /J/ > /H/ = /N/ > /Q/ for putting accents on the special morae, whereas those in the younger generation displayed the order /J/ > /N/ > /H/ = /Q/.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：音声学、山口方言、特殊モーラ、アクセント、世代差

1. 研究開始当初の背景

日本語の韻律的単位が何であるかの議論は長く続けられている。アクセントを、モーラ方言かシラビーム方言かを分類する際の指標として使用することは、古くは亀井(1956)等によって行われている。ここでは、数える単位がモーラなのかシラブルなのかに加え、アクセントを担う単位がモーラなのかシラブルなのか重要とされている。後者は、特殊拍と二重母音の副母音がアクセント核を担いけるか否かにより判断される。上野(1984)・早田(1986)等によれば、日本語の韻律的単位の分類としては、長さを数える単位・アクセントを担う単位の両方がシラブルである方言、長さを数える単位・アクセントを担う単位の両方がモーラである方言、そして長さを数える単位はモーラであってもアクセントを担う単位がシラブルである方言の存在が知られている。東京方言のようにシラブルがアクセントを担う単位である方言の場合においては、「～局」「～虫」のように、そのアクセントの複合規則によって前部要素最後のモーラにアクセント核が来ると予測される場合でも、その位置が特殊拍や二重母音の副母音であれば、特殊拍や二重母音の副母音は独立性がとぼしくアクセント核を担いにくいので、同一シラブル内のひとつ前の独立性の高いモーラへアクセント核がずれるという現象がある。それに対して山口方言は、特殊拍がアクセント核を保つことができるはっきりとしたモーラ方言であると言われてきた(上野 1984, 2003)。

2. 研究の目的

山口方言におけるアクセントを担う単位がモーラからシラブルへ変容しているかどうかを確認し、その原因を究明することを本研究課題の目的とする。そのために、次の3点を検討する。

(1) 山口方言話者(老年層と若年層)の産出において、特殊拍(撥音・長音・促音)および二重母音の副母音がアクセント核を担うことができるか否か。

(2) 特殊拍および二重母音の副母音の発音持続時間、ならびに発音持続時間の同一シラブル内に占める比率が世代間で有意に低下するか否か。

(3) 老年層は特殊拍にアクセント核を置いた刺激に対して早く正確に反応し、逆に若年層は特殊拍にアクセント核を置かなかった刺激に対して早く正確に反応するか否か。

3. 研究の方法

研究計画は、大きく分けて産出実験と知覚実験に分けることができる。

産出実験は、山口方言話者(老年層と若年層)に、特殊拍や二重母音を含む語とダミー語を提示し音読していただき、その音声を録音する。その音声をもとに特殊拍等にアクセント核を置いているか否かの世代間比較・地域間比較を行う。また、単語・特殊拍を含むシラブル・特殊拍の持続時間を測定し、比率を計算して世代間比較を行う。

知覚実験は、特殊拍を含む刺激語と特殊拍を含まない刺激語、それとモーラ数等の条件を合わせた刺激語をランダムに提示し、老年層と若年層で反応時間および正答率に有意差があるか測定をするものである。

4. 研究成果

山口方言の産出においてアクセント核が特殊モーラ上に来ることができるか否かについての調査結果をまとめることができた。

山口県内にのみ居住歴を持つ、若年層16名と老年層16名の、撥音/N/、長音/H/、促音/Q/、二重母音/ai/の副母音の4種類の特殊モーラを含む60語(各15語)の産出において、特殊モーラにアクセント核を置く頻度を世代間で比較した。

その結果、若年層ではアクセント核を同一シラブル内の1つ前のモーラへ移動させて発音する傾向が強く、老年層に比べて特殊モーラにアクセントを置く発音が大幅に減少していた。特殊モーラにアクセント核を置いた頻度は、N/では老年層39.58%に対して若年層5.42%(表1)、H/では老年層44.58%に対して若年層1.67%(表2)、Q/では老年層13.33%に対して若年層0.83%(表3)、J/では老年層58.75%に対して若年層10.83%(表4)であった。

老年層の間で、アクセント核が置かれる頻度は特殊モーラによって大きく異なり、3つに分かれ、多い順に/J/>H/=N/>Q/となった。若年層の間では特殊モーラにアクセント核が置かれる頻度はかなり少なくなっていた。少ないなかでも3つに分かれ、多い順に/J/>N/>H/=Q/となった(図1)。

知覚実験については、引き続き検討中である。

表1 /N/(撥音)にアクセント核を置く発音の世代間比較

/N/を含む刺激語	アクセント核を置いた人数		
	老年層	若年層	
郵便局	ユービンキョク	12	3
閲覧者	エツランシャ	9	1
タンポポ	タンポポ	8	0
一番乗り	イチバンノリ	8	0
安全ピン	アンゼンピン	8	1
運賃	ウンチン	7	0
結婚式	ケツコンシキ	9	3
新聞社	シンブンシャ	9	3
一軒家	イツケンヤ	7	1
一本道	イツボンミチ	6	1
どんぐり	ドングリ	4	0
音楽	オンガク	3	0
本棚	ホンダナ	3	0
単位	タンイ	1	0
パンフレット	パンフレット	1	0
アクセント核を置いた人数		95	13
アクセント核を置かなかった人数		145	227
アクセント核を置いた割合		39.58%	5.42%
独立性の検定		$\chi^2(1)=80.335, p<.001$	

注: 老年層と若年層の総頻度は、15種類の単語×16名で240である。

表2 /H/(長音)にアクセント核を置く発音の世代間比較

/H/を含む刺激語	アクセント核を置いた人数		
	老年層	若年層	
コオロギ	コーロギ	12	0
中国	チューゴク	11	1
影響力	エーキョーリョク	10	0
セーラー服	セーラーフク	11	2
一升瓶	イツショビン	9	0
てんと虫	テントムシ	9	0
胡瓜	キューリ	8	0
交通費	コーツヒ	8	1
胃腸薬	イチョーヤク	6	0
ドーナツ	ドーナツ	5	0
五十代	ゴジュウダイ	5	0
飛行機	ヒコキ	5	0
10時	ジュウジ	3	0
二重丸	ニジュマル	3	0
キュービー	キュービー	2	0
アクセント核を置いた人数		107	4
アクセント核を置かなかった人数		133	236
アクセント核を置いた割合		44.58%	1.67%
独立性の検定		$\chi^2(1)=124.327, p<.001$	

注: 老年層と若年層の総頻度は、15種類の単語×16名で240である。

表3 /Q/(促音)にアクセント核を置く発音の世代間比較

/Q/を含む刺激語	アクセント核を置いた人数		
	老年層	若年層	
割拠	カツキョ	4	0
コロクケ	コロクケ	4	0
いたざらっ子	イタズラッコ	4	0
四角形	シカクケ	4	1
ブロッコリー	ブルツコリー	3	0
さっき	サクキ	3	0
歌合戦	ウタガクセン	2	0
雨合羽	アマガツパ	2	0
一揆	イツキ	2	0
一切	イツサイ	1	0
括弧	カッコ	1	0
決済	ケツサイ	1	0
三角形	サンカクケ	1	1
エッセンス	エツセンス	0	0
カップル	カツブル	0	0
アクセント核を置いた人数		32	2
アクセント核を置かなかった人数		208	238
アクセント核を置いた割合		13.33%	0.83%
独立性の検定		$\chi^2(1)=28.489, p<.001$	

注: 老年層と若年層の総頻度は、15種類の単語×16名で240である。

表4 /J/(二重母音の副母音)にアクセント核を置く発音の世代間比較

/J/を含む刺激語	アクセント核を置いた人数		
	老年層	若年層	
開会式	カイカイシキ	15	3
待合室	マチアイシツ	14	2
挨拶	アイサツ	12	1
玄米茶	ゲンマイチャ	12	1
ネクタイピン	ネクタイピン	11	0
閉会式	ヘーカイシキ	13	3
玄米パン	ゲンマイパン	12	2
経済力	ケーザイリョク	9	1
海軍	カイグン	6	0
大工	ダイク	7	1
社会人	シャカイジン	6	0
熱帯魚	ネッタイギョ	6	0
払い	ハライ	6	2
飼い主	カイスシ	12	10
ナイロン	ナイロン	0	0
アクセント核を置いた人数		141	26
アクセント核を置かなかった人数		99	214
アクセント核を置いた割合		58.75%	10.83%
独立性の検定		$\chi^2(1)=121.444, p<.001$	

注: 老年層と若年層の総頻度は、15種類の単語×16名で240である。

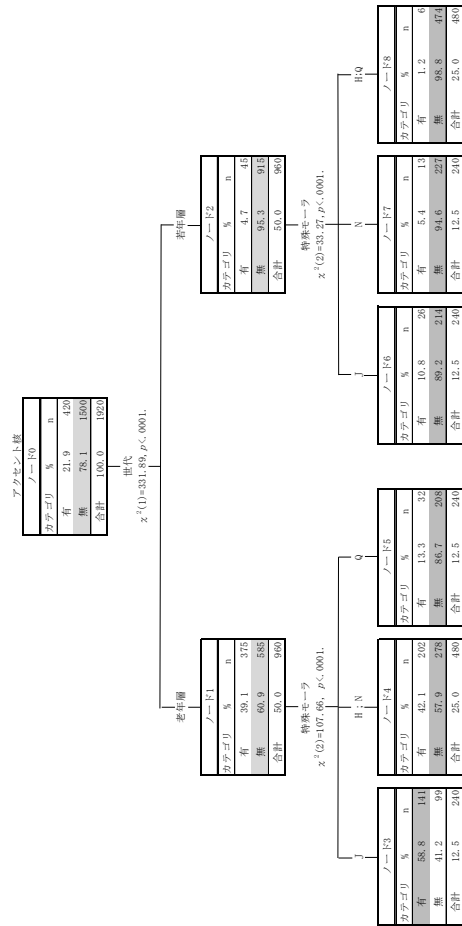


図1 特殊モーラにアクセント核を置くか置かないかを予測する分類木分析の結果

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

①池田史子、玉岡賀津雄、山口方言の特殊モーラを含む語の産出におけるアクセント核の位置に関する世代間比較、山口県立大学共通教育機構紀要第4号、査読無、2013、25-31

[学会発表] (計1件)

①玉岡賀津雄、英語の強弱アクセントの知覚：その語彙力と聴覚能力への影響、外国語教育メディア学会 (LET) 第77回 (2011年度春季) 中部支部研究大会における基調講演、2011/5/11、於中部大学

[図書] (計1件)

①山口県立大学国際文化学部編 (池田史子 pp. 227-233)、大学的やまぐちガイド―「歴史と文化」の新視点―、2011、昭和堂

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 史子 (IKEDA FUMIKO)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：10275430

(2) 研究分担者

玉岡 賀津雄 (TAMAOKA KATSUO)

名古屋大学大学院・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：70227263

(3) 連携研究者

()

研究者番号：